# 久我記念美術館

**7月企画展 7月3日(土)~18日(日)**
**（月曜休館・入場無料）**

## 久保サチヨ・伊東美代子・山口香寿子
# 三人合同展

**7月の久我美術館は、3日から18日まで「三人合同展」を開催します。久保サチヨさん（パッチワーク）、伊東美代子さん（粘土）、山口香寿子さん（書道）の3人が、還暦を記念して行う企画展です。**

還暦を記念に、自分たち3人の作品を展示して想い出を作ろうと決めたところ、美術館が取れ、れ、最高の喜びでここに実現することができました。

3人ともお互いに忙しい中、自分たちなりに作りあげた作品を、みなさまに見ていただけることは、一生の想い出と感激でいっぱいでございます。

パッチワークは、小物やバックなど日常使って楽しむ事ができ、粘土もお部屋に飾ったりされる置物や小物のビンのふたを、かわいく粘土でアレンジしたり、入れ物にしたりする物を作っており、また、書道も一般にかしこまった書道展でなく、これもお部屋に展示したりワイン袋に書いたり、いろんな色紙に書いて楽しんだりの、3人の作品は“私も欲しい”というものばかり、展示しております。

7月3日（土）から18日（日）まで、3人の作品を展示します。短い期間ですが、みなさまのお越しをお待ちしております。

▲ 久保さんの作品

▲ 伊東さんの作品

▲ 山口さんの作品

## 6月の企画展

6月5日（土）から27日（日）まで
「青柳 栄生子　展」を開催しています。



# まちの史跡めぐり……87

町文化財専門委員　石瀧　豊美

## 古新聞切抜帳から…（5）
## ＝福岡日日新聞と福陵新報・九州日報＝

明治・大正時代の新聞から、当時の須恵村関係の記事を掲載しています。

◆　◆

**明治41年1月14日**（九日）

**●校舎落成式**　粕屋郡須恵尋常小学校にては、予て校舎増築中なりしが、去る十日落成式を挙行せり。先づ吉松村長の祝辞、梶川校長の答辞ありて、其式を終へ、式後、来会者一同へ、酒肴の饗応ありたり。来賓の主なるものは、鈴木新原海軍採炭所長、新納郡長、黒瀬、田代両県会議員、田原養柏氏、田原茂雄氏、外数十名にて、頗る盛会なりしと。

**明治41年3月12日**（九日）

**●美挙**　糟屋郡須恵村、眼科医田原養柏氏は、今年初老に相当せしを以て、祝宴費用を節し、同村氏神玉垣新築費用として、金百五拾円を寄附せりと。誠に美挙と云ふべし。

**●射撃場新設**　糟屋郡須恵村在郷軍人尚武会にては、予て予備少尉田原稔指導の下に射撃場新設中なりしが、此の程落成したるを以て、近々第一回射撃会を開催すと。

**明治43年1月7日**（福日）

**●除幕式と千人祝**　糟屋郡須恵尋常校長梶川猛氏頌徳碑除幕式、并に同校卒業生千人祝は、去三日午前十時より開会。唱歌、校長の勅語捧読、会員総代の開式辞、決算報告、祝辞演説、卒業生総代の謝辞、校長の答辞等あり、宴に移りたるが、余興として煙火、琵琶、庭球、相撲等あり。又校内には、同校并に実業補習校生徒の学芸品を陳列し、梶川校長に対しては、表徳会より記念品并に慰労金八十円、村会より同百円を贈呈し、当日来賓及び会員の来会するもの多数にて、盛会なりき。

**明治43年8月28日**（福日）

**○水田に瓦斯燃ゆ　昼夜奇観を呈す**

筑前粕屋郡志免村海軍採炭所第五坑附近に、今春一個の古井戸を浚渫せんとせしもの、瓦斯の気に触れ一時人事不省となりしかば、試みに燐寸を摺りて投じたるに、忽ち井中の瓦斯に火移り、焔々と燃上りたる事は、当時の紙上に記せしが、其後も火勢は稍や衰へたるも、引続き燃えつゝありて、夜間などは物凄き光景を呈し居れり。然るに同坑大煙筒を距る十数歩の水田に瓦斯噴出し始め、一種の臭気を放ち居りしが、此頃何者か火を移したるものか、二畝歩余の一枚の田は其所にも此所にも青白色の瓦斯火燃上り、所々に雑草の僅に生ぜるのみにて全くの荒田となり、晴天続きの折は亀裂の箇所より蝋燭三本位を一時に焚如き瓦斯火幾十ヶ所となく噴火し、降雨続きの際は水上に燃ゆるなど、不知火のそれの如く、昨今盛んに噴火し、如何にしても消火せしむる能はず。日夜奇観を呈し居れるが、斯る無尽の瓦斯を何とかして吸集し、点火又は煮沸等に使用し得るものとすれば、一廉の公益となるべしといふ者さへありと。それは兎も角該水田は博多湾鉄道酒殿駅より約十町位にて、志免尋常小学校の裏手に当る数町の所なりといふ。

**明治43年10月22日**（福日）

**○信用組合設立認可**　粕屋郡須恵村飛来盛之助氏外六名の申請に係る、無限責任佐谷信用組合設立の件は、昨日認可ありたり。

**大正2年12月6日**（福日）

**○上世須恵の製陶所（一）**　筑前史談会　中山平次郎

（前略）此際予の先づ注目した処は粕屋郡須恵である。此地に皿山があり、旧黒田藩時代に須恵焼と称する一種の瓷器が製造せられた事は判明であるが、諸書の記述に徴すると、須恵焼の開窯は宝暦年間の事であつて、此製陶以前に既に須恵なる地名があつたのである。続風土記（元禄寛永の頃）には製陶の記事無き須恵の名が掲げられ、又其以前の元和四年の黒田長政公の文書には、此地に符合する地名として陶と記されて居るのである（原文……今度粕屋郡佐谷陶両所之原田地開に申付候云々）。由来「する」なる地名は窯業と関連ある事多きに由り、前後三回若杉山南麓の須恵村を中心とし、其附近の地を捜索して見た。上須恵皿山の須恵焼の窯址よりは、種々興味ある物件を拾得したが、此物は他日供覧する機会があらうと信ずる。兎に角此窯址よりは祝部を発見するを得なんだ。粕屋郡須恵村に於ける祝部の窯址の有無は、今尚予には疑問に属する。更に捜索を継続して見やうと思ふ。

粕屋郡方面の捜索が思はしからざるに由り、予は他郡に於てそれと思ふべき土地を見ださんとし、陸地測量部の地図を検して、宗像郡赤間駅の北方に須恵なる処がある。之れと列んで土穴なる村落があるを知り、疑はしく感じたに由り、某日出向いて見た。（後略）

※　中山平次郎は九州大学教授で医学者・考古学者。ここで言う祝部土器は現在の須恵器のことで、中山は粕屋郡須恵に須恵器の窯址を探したが見つからず、宗像郡須恵へと探索に向かったと述べています。